

# かるた界の“龍虎”対談

## 川崎文義

Fumiyoshi Kawasaki



川崎文義(かわさき ふみよし)  
昭和63年9月27日生まれ28歳  
小学1年生から競技かるたを始める

競技かるた第63期名人の川崎文義さんと準名人の三好輝明さん。お二人ともに越前市出身・在住で小学生から競技かるたを始め、今も情熱を注いでいます。

「強制的にかるた教室に入ったので、最初は面白くなかったし、負けると怒られる状況が怖かった。でも、練習するうちに覚えられるようになり、「強くなりたいたい、一番になりたい」と思うようになりました(川崎)

「かるた教室にはいつも友人が数名いて練習もゲーム感覚で楽しかった(三好)

そして、今まで続けて来られたのは、地元の取り組みが熱心だったからだと言います。

「地区ごとに熱心な大人がいて、指導も丁寧でした(川崎)

「地区同士での練習試合もあって、いろんな子どもと練習できたのがよかったですね(三好)

その頃、競技かるたの大半は女子で、男子は数えるほど。恥ずかしさがあったのかと思いきや、「女子に格好いいところを見せたくて、練習も試合も頑張りました(三好)と微笑ましいエピソードも披露してくれました。

各地区のかるた教室は、子どもと大人が一緒に練習する、年代を超えた部活動のような雰囲気もちらん大人からの指導はありますが、「教えてもらう」というより、大人の技を見て盗めという感じでした(川崎)と、当時は振り返ります。

数年後、二人はもっと強くなるために、現在所属する福井渚会の

練習に行くようになりました。「子どもの希望とはいえ、武生と福井間を車で送迎するのはかなり大変だったはず。親には感謝の一言に尽きますね(三好)

お二人以外にも、地元から渚会に通う子どもが数人いたことから、互いに助け合いながら送迎したこともあったとか。

地元でみっちり基礎を学び、福井でさらに技を磨く。それを何年も繰り返すことでお二人は強くなり、名人として準名人という地位に上り詰めたのです。

「今の子どもたちは、地元での勝利だけで満足しているように見えて、少し残念に思います。上には上があることを知ってほしいし、地元の先輩としてはもっと強くなしてほしい(川崎)



三好輝明(みよし てるあき)  
昭和58年4月20日生まれ33歳  
小学4年生から競技かるたを始める



「やるなら頂点を目指さないと。名人・クイーンへの挑戦は、資格があれば年齢は関係ありません。地元からの挑戦者が増えてほしいですね(三好)

お二人ともに、地元が強くするための指導や支援、努力は惜しまないと力強く語ります。近い将来、お二人に続く地元対戦が数多く実現することを期待したいものです。

## 名人位戦の凄さ

競技かるたが本格的に行われるようになったのは、明治37年。現在の競技かるた人口は約100万人といわれており、さまざまな競技かるた大会が開催されています。その最高峰が「競技かるた名人位・クイーン位決定戦」です。名人位戦は昭和30年、クイーン位戦は昭和32年から開催され、平成29年でそれぞれ第63期、第61期を数えます。

毎年の10月に東・西日本での予選(トーナメント形式)を行い、11月に各予選の勝者が挑戦者決定戦を行い、その勝者が名人位決定戦の挑戦者となります。

名人位決定戦は年明け1月、近江神宮(滋賀)で開催。名人と11月に決まった挑戦者として5回勝負を行い、勝者が名人、敗者が準名人となります。

名人までの道のりは長く、険しいのが実情で、同大会出場には「一般社団法人全日本かるた協会」認定の四段以上の資格が必須となっています。



名人位戦に臨んだのは三好さんが先で、平成20年(第54期)。以後、平成22年(第56期)、平成24年(第58期)、平成29年(第63期)に参戦。

川崎さんの初参戦は、平成23年(第57期)。平成28年(第62期)に福井県初の名人となり、平成29年(第63期)に防衛を果たしました。

63期の長きにわたる名人位戦の中でも、越前市勢同士の対決は史上初で、注目を集めました。お二人は、「史上初の快挙に

驚くと同時に、かるた王国である地元の芽がやっと出たと感動しました。当人同士はいつも通りでしたが、練習中は会の仲間がいると気遣ってくれました。その気遣いに申し訳ないと思いつつ、うれしい悩みだとも感じていました」と話してくれました。

第64期戦へ向けての準備はすでに始まっています。2年連続、越前市勢同士の対決も夢ではないでしょう。



## 三好輝明

Teruaki Miyoshi

